

というお話を聞かせていただいて大変嬉しかったことがございます。そういう知的なものを社会の財産として引き継いで仕事をおこすということが「仕事おこし」という言葉の中には含まれているということをその時痛切に感じたわけでございます。

ですから、仕事おこしということは、単純に「失業しているから何かいい仕事がないか」ということでいきなり成功する性質のものではなくて、人類というのはやはり企業や産業で働きながらそれぞれに貴重ないわば知的な財産を自分の身体で受け止めて継承してきているのだと思う。それを再生しながら創造的に発展させていこうということです。この「再生する」「総合的に発展させる」というと言った時に、皆さん方も強調しておられる地域のコミュニティというもの非常に大きな役割を果たします。行政が地域で仕事をおこしをされる時に、その地域の方々がそれをどのように受け止められるか、ということの仕事が成功するかどうかの決め手でございます。これは失業者だけでなく、例えば福祉事業などというものも地域でそれ以後あちこちでおこりました。保育所づくりの仕事おこし運動や障害者の共同作業所づくりなども非常に大きな仕事おこしでした。

私は最初は既製企業の倒産の研究から始めたのですが、やっているうちに仕事おこしというのは、実はそれだけでなく新しく社会にニーズが生まれる。例えば共働きで働こうと思っているのに保育所がない、という時にどうするか。障害者も同じことです。障害者の施設をつくるというのはそれなりの社会の切実なニーズに応じて、どこからどのように社会資源を動員してき

てつくるのかということを考えなければいけない。これは、企業の中に継承されてきたノウハウと同時に、地域社会で継承してきたノウハウをどのように引き継ぐかというのが大事な課題であります。地域でどういう福祉行政がやられてきたということは非常に大事な課題ですし、それまでお寺などで行われていた保育の経験をどのように取り込んで地域で福祉事業をおこすか、ということも大事な経験でした。障害者福祉も基本的には同じだと思います。障害者福祉の盛んなところというのは、自分なりに地域社会に中小企業の方々がかなり寄付されて、そういう施設をつくっている伝統のあるところが非常に多いのです。それは日本の地域社会の中に障害を持つ人びとに対して皆で金を出し合ってそれを支援して、そこで自立した仕事をおこすためにどうすればいいかということを考えているという、社会の中にいわば知的な要素というか「どうすればおこせるか」という要素が含まれている。これをどのように発展させるかが、非常に大事な課題であると思いました。

1. タテ型社会からヨコ型社会へ

今回、新しい協同労働のための協同組合法制というものが提起されています。その実現のために私自身は2つのことが大切ではないかと思っています。1つは、労働というものは一人一人の中に知的な財産を形成するものであり、それが自立の基本として形成されるものであるということです。例

えば職業訓練がそうでありますし、最近では大学とのネットワークをつくりまして再訓練・再教育機構というものの中で一人一人の教育・訓練をしながら仕事をつくりあげていく、という形のものも沢山ございます。

その意味では、人間の労働というものの中に知的な要素をどのように認めて、その持続的発展をどう保障するか、ということを考えていかないと、仕事おこしが必ずしもうまくいかないんじゃないか、と思います。ですから、「労働者協同組合も系統的に幹部は大学院に派遣して研修してはどうか」と私は何度も言ってきました。「そんなことをしたら職場から浮いてしまいますよ！」とからかわれておりますが。

さて、今どきのように世の中のニーズは激しく動くとき、それをキャッチするにはどうすればいいかを考えなければいけない。それをどのように把握するかということは、端的に言えばある意味で相当高度な、あるいは国際的な学術的知識を身につけて研究しないとできないようなことですよね。経験や思いつきだけでできることではない。

だから、やっぱりきちんと勉強することも大切でしょう。

高度成長期には日本の企業は外国で研修をさせましたけれども、ほとんどの人がアメリカの会社に行きました。何故かと言うと日本の会社に帰ってきたら、いくら勉強したって給料は元のまま、もう一度「ロー

f | e f y f " u | e A e c e U μ (笑)、下から順番に上がっていくようにできていますから、年功序列のローテーションに全部入れられてしまって何を勉強してきても評価はされない、というのが日本の特徴なんですね。むしろ多くの人は周囲から「あいつ勉強しやがって」「得しやがって」と足を引っ

張られて大変損だ、と認識しておられます。

これは日本社会というものの大きな壁なんです。端的に言うと日本社会というのはタテ型社会でありまして、水平的になっていないわけです。これは実は日本だけではありません。世界的なこの不景気の原因についてアルヴィン・トフラーという人が何年も前に分析して『第三の波』というミリオンセラーになった有名な本を書いております。その冒頭で彼はなかなか面白いことを言っております。

「テロリストが人質と死のゲームを繰り返ろげ、通貨は第三次世界大戦のうわさのなかで揺れ動き、大使館が炎上し、あちらでもこちらでも武装警察官が出動準備を急ぐ世の中である。新聞の見出しを見るたび、恐怖に胸がおののく。恐怖のバロメーターである金地金の価格は史上最高。銀行は身震いし、・・・行政は麻痺し、打つ手もないというままである。」これは1980年に刊行されておりますが、まったく今と同じ状況だといえます。何故このようなことが起こったかという、それは大量生産大量消費時代が終わっているのに、それに相応しかった権力集中型、画一型、命令型の管理システムを頑迷に守ろうとするエリートたちの知性の欠如こそがこれをもたらした、と彼は述べています。

時代が変わっているのに一向にそれを認めようとしない。これは先ほど折角勉強しようという人が沢山いるのに、その人が世の中で社会的に貢献できるようにサポートしながら新しい仕事をおこしていこうということに日本社会は大変冷たい、ということを示しております。

2. 教育減税と仕事おこし

今でも減税、減税とよく言いますよね。企業減税があってもひとつも景気が良くなりませんね。私に言わせたら今一番効果がある減税は教育減税に尽きておるわけです。例えば皆さんが大学や大学院に行かれるときにそれは全部タダで、その分は全部政府が払いますと言ってくれたら、おそらく相当な数の人が大学や大学院に行くと思うんですね。新しいことを勉強しなければとと思っている人は多いんですから。それから、今、教育費がほとんどの家庭では一番大きな負担になっていて、進学率が低迷するくらい非常に深刻な状況になっています。

一番必要なのは教育減税ですね。私は昔から「教育減税もやらずに何が減税か」「減税で景気振興などと口で言っているが、本当にやるつもりなら、人的能力の開発にこそ補助金を出すべきで減税すべきだ」と言ってきました。それをしないで、景気が悪くなるといくら言ったって、そんなものは通りはしない。何故かと言えば、これからの社会はA・トフラーが言うように、画一型、命令型ではやっていけない社会なんだから。

トフラーの言う通り、頑迷なる画一型の命令主義的な秩序というものはなかなか崩れないんですね。やっと一部が崩れ始めたというのは、どこからかというとはほとんどが中小企業からです。いわゆるベンチャー企業などというのは、その秩序が崩れ始めた証のようなものです。だから、皆さんが

やっておられる仕事おこしもそのうちのひとつであり、大きく言えば、日本のこれまでの画一型秩序は崩壊してきていますので、それを守ろうとして頑張れば頑張るほど、不景気は長引きます。とうの昔に倒産しているはずの大会社を助けようとして税金をつぎ込む。新しいところに金を回す余裕は全然なくなっていくます。そうすると新しい仕事おこしの原資が、銀行によって保障されないといった、社会的には大変奇妙な現象が起こっているわけですね。

大量生産・大量消費・大量廃棄型の産業社会は、激しく変化する市民の個性的な欲求やニーズさらには潜在的な需要に応えることができず、予測を誤っては巨大な過剰設備と不良債権の山をつくって、それに押しつぶされる。それでわれわれが金利を得られないような低金利と財政赤字でやっとな調達した産業資金は、ほとんど国際的な投機活動の大波に全部呑まれてしまう。いくらつぎ込んでもヘッジファンドという恐ろしい国際的な投機屋に巻き上げられてしまう。「この株はいい」と思って買ってもあつという間に下がってしまう。そこで持続的な金利収入は低下して、税や医療・福祉負担の増加する。こうなりますから当然消費財市場の長期的停滞が起こる。金銭的価値の最大化を図ろうとすれば、企業の戦略や戦術は、前門の虎である「過小な消費」と後門の狼である金融資産の減少というものの間に挟まれて身動きが取れない。こういう状態になっているということです。

3. 創造型・職人型労働を育てる時代

今の仕事は、昔の大量生産方式と違いまして、かなり職人的な仕事・労働がやはり増えてきているわけですね。いわゆる機械労働というのはおおむね単純なものです。単純な反復労働というのははっきり言ったら皆コンピューターにまかせていい時代に入ってきています。そうすると人間の労働とは？ということになるわけですが、それが実は先ほども申しましたように、知的要素のはなはだ大きい職人型の労働になるわけです。昔から「クラフトマンシップ」という言葉がありますが、芸術家や科学者と市民のニーズを結びつけるものが「職人」の定義とされています。世の中の必要に見事に応えて、科学者や芸術家の成果を取り入れてものをつくれる人を職人といいます。今の多くの製品やサービスというのは職人の技でないと世の中の人を受け入れてくれないわけです。これだけ生産力が高まり少ない労働時間で大量にもものができるようになって、人びとの生活に本来は余暇が生まれている。その余暇の中から、生活の質というものに高い関心が出てくる。それは当たり前のことです。生活の質の高まりが出て来れば来るほどに、それに応えようとした製品やサービスは、一人一人の個性に応えた高度な質が求められます。画一的なものでは通用しない。「あたかも注文生産であるかのようなものが求められる」とA・トラーは言っております。ですから、「現代社会は農業的な社会に近づくであろう」とも言っております。つまり一人一人農業者のように自分で職人的に労働して質の高いものをつくり、その質の高いものが世の中に受け入れられるような、そういう時代になってきているというわけです。

そうしますと、職人が生み出す労働というものは知的な要素が非常に高く、働く人はその知的な要素を絶えず何らかの意味で学習し教育を受けないと持続的に良いものはできない、というのが今日の時代の特徴です。一遍つくったからこれでおしまい、というわけにはいきません。ちょうど科学者や芸術家の変化を無限に求めて次々と新しい科学的成果を追い求め、より新しい芸術をつくりだそうとするのと同じように、職人も常に新しいものを求める。

労働者協同組合の機関紙には、各地の創作的・個性的な仕事おこしというのが毎日のように伝えられておりまして、「今までにない仕事のシステムを開発した」とか「今までにないやり方で清掃労働を組織し、大変喜ばれた」などとあります。清掃というものの一つとっても、今までの仕事ぶりとはまったく違うものを創造的におこしていく世界であり、いつもそういうことをやろうと思うと自分たちだけではやれなません。例えば専門家に頼んで、効率の良い清掃のやり方やどんな薬品を使えば良いのか、どういう風に水を撒けばよいか、といった専門的な研究者の助言を得ながら、仕事をつくっていく。そのことによって労協の仕事の質は類似の業者と比べて随一である、というようにして行ってこそ仕事が絶えずおこせる。そうしたら類似の業者もそこから刺激を受けて「なるほど労協のようにやればいいんだ」ということになると当然そういう方向に仕事を発展させようとする。これは仕事の中に多くのモラルを持ち込むこととなります。

皆さん方の仕事というのは大変モラルの

高いものですね。ですから消費者の共感を呼ぶことができるし、経済学者のアマルティア・センが言うように共感をこえて最近「コミットメント」というものが労働の中に入ってきている。共感というのは自分が他人と共感することですが、コミットメントというのは他人の立場も考えて他人をサポート（支援）する労働ができるという意味です。人間は他人を支えるという観点で仕事をする時代に入ったとA・センは言っております。昔アダム・スミスという人は「商品を買するにはシンパシー（他者への共感）がいる」と言ったのですが、他人の商品の良さを評価するには、「これはどんな苦勞をしてつくったのか」ということを知ることが大事である。しかし今はさらに「仕事の質」の他に、公害問題や環境問題など、そしてケアのように「生きる力を人に与える」という要素が入ってきました。

労働者協同組合の場合、介護労働というのが重要な労働の一つですが、この介護労働というものは、単に共感しているだけではできません。さらに進んで「どのようにこの人の自立を支援するか」ということを考えなければ介護労働はできないんですね。これはケアというものの概念に非常に広がってきて、ケアというのはいわゆる「癒し」ではなくて、癒しもあるが「自立を支援する」という内容が含まれないと、現代的なサービスとして成立しない。今は多くの社会秩序が、放置しておけば一人一人の自立を次々と脅かすような状況が出てきています。A・スミスの時代は一人一人の自立を脅かすようなことというのはそれほどなかった時代で、市場で取り引きする人は、共感というモラルさえもっていれば何とか世の中やっていた。しかし、これからはコミット

メント＝他人の痛みを理解して自立を支援する労働の仕方であるわけです。

こういう労働の仕方をやっていった場合に、そこで生まれる製品やサービスはどういう質を持つか、というのが非常に大きな問題となると思います。端的にいえば創造という内容を何らかの意味で持たざるを得ないだろうと考えられます。その意味では日々の労働の中に創造性を絶えず追及せざるを得ない、という問題が入ってくるわけですね。

私は経済学を昔からやっております（笑）、経済学の最新の動向というのを勉強しておりますと、最近の経済学の傾向というのは非常に昔と変わってきております。何でもコストを厚くすれば大量生産ですから安く売れて世の中は幸せになる、と昔の本には書いてあったんですね。今では一番重要なのは、創造的な質をつくり出すこと、と大抵の本に書いてあります。ノーベル賞ももらったスティグリッツもそういう考え方の人ですが、質の高いものをつくり出すということですね。これが最も有用であり、質の高いものをつくるということはつまり人びとの生きがいとして労働ができるということであり、ひょっとすると科学者や芸術家の心を持ちながら職人的に労働し、科学者や芸術家以上に消費者を意識して労働する。消費者を意識するからこそさまざまにコミットメントということを考えて労働する。これが実は質の高いものをつくっていく。スティグリッツはこういうものを「質の高い創造の成果」と呼んでおります。そしてこれが普及するためには情報サービス事業というものが必ず必要であると言っております。

だと思うのですが、共感しコミットメントしてくれる人を増やしたら、そこで学習する人びとを増やしていかなければいけない。そしてその学習した人びとが再び、創造的な労働に関心を持って労働の現場を訪問し交流する、というように事態を発展させることが必要であります。

最近の多くの創造的な事業、中小企業やベンチャーも含めてそうなんです、地域からの情報発信と自分の企業の情報発信が結合しているところが圧倒的に多いんですね。例えば私は福井にいまして、福井の中小業者も最近はほとんどネットを応用して、福井県全体のネットの中に自分の製品も位置づけて、そこから全国へ発信しています。それがすべて今のところうまくいっているとは思いませんが、コミュニティ情報としてそれが全国に流れているんです。その中小企業の製品がその地域の質をある意味で全日本に問いかけているわけです。福井というところは食品にしたって日本一の食品が沢山ある。カニは皆さんご存知でしょうけれども、カニだけでなくお米にせよ味噌にせよお酒にせよ日本一の質をもってやっておられます。そういうものを系統的に情報発信して、福井を訪ねてもらおうということが非常に大事です。全国的に福井の物産に対するファンを増やしていく。これはリピーターというんですけれども、リピーターを確保する戦略がないと、事業体の組織は発展しない。

労協でも同じだと思うんですね。うちの清掃の仕事ぶりや介護の仕事ぶりは日本一である、それはこの地域のモデルから発信されていて、多くの地域にもし学習していただいたら急速に普及して、安心して自分も健康を守りながら仕事が出来ますよ、と

いうのまでつくってもらおうと、当然それに向かって多くの人が押し寄せて来るんです。かつて地域生協で有名なところがあって、皆そこに見学に押しかけて行くものだから根を上げてしまった、ということをお聞きされたことがあります(笑)、そういう状況というのはいたるところで起こっていると見ていいです。

新しい産業戦略、つまり創造型産業を核にして情報サービス産業を従えながら、大規模な人的交流が発生するような産業組織、これが現代的な産業組織のあり方だと思います。今までの産業組織はどちらかというとなり産業、二次産業、三次産業というようなことで、「どうしたら一次産業を減らして世の中進ませるか」とか「一次産業を減らすのではなく、農業を近代化して機械を入れたらいいのでは」とかそんなことばかり言っているんですが、これはちょっと時代遅れですよ。農業だってもう職人農業の時代ですよ。現実にはどんどん市場が増えていきます。生協の方などは良くご承知のように、農家でも自分の出荷する商品に全部自分の銘を入れています。まあ、そうしないと売れません。そういう意味ではサンデーマーケットのようなものがあちこちでできていますが、どのような家族がどのような農産物を欲しがっているか、ということをしちんと掴んで、それに対して私のところでなければできない質の高い有機栽培でつくったものです、というものを出す、これがやはり新しい生産のやり方で、これは世の中に受け入れられてますます発展していきだろろうし、その大量生産品というものの威力が今高くても、それに向かって対抗できる一定の方向性を持っていると思います。

